

演目 『春日龍神』

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1	シテ	八大龍王ハ	八大龍王は	冠を傾ける、つまり頭を下げている。 (②【八大龍王】)
2		八つの冠を傾け	八つの冠を傾け	
3	地	所ハ春日野の月乃三笠の雲に上り	ある龍王は春日野の三笠山の雲に上り	
4		地に下りて飛ぶ火の野守も出でて見よや	或いは地に下る。「誰も彼もよく見るが良い。」	(③【和歌の引用】)
5		摩耶の誕生鷲峯の説法	釈迦の誕生、靈鷲山での説法	
6		雙林乃入滅悉く終りてこれまでなりや	沙羅双樹下の入滅の様など悉く示した。	
7		明恵上人さて入唐ハ	「これでお別れだが、明恵上人よ。唐へ入ることはどうする。」	
8		とまるべし	「思い留まります。」	
9		渡天ハ如何に	「天竺へ渡ることはどうする。」	
10		渡るまじ	「渡りませぬ。」	
11		偕佛蹟ハ	「では釈尊の古跡は...」	
12		尋ぬまじや	「尋ねません。」	
13		尋ねても尋ねても此上あらしの雲にのりて	「いくら尋ねてもこの上はないのだ。」そう言	入唐渡天しなくても、日本にも同じ位徳の高いところがある事を意味している。
14		竜女ハ南方に飛び去り行けば	龍女は南に飛び去り	(④【南方無垢世界】)
15		龍神ハ猿澤乃池の青波	龍神は猿沢の池の波を蹴立てて、	
16		蹴立てけたててその丈千尋乃大蛇となつて	長さ千丈の大蛇となり	
17		天に群がり地に蟠りて池水をかへして	天地一面に広がり地水に波を立てて	
18		失せにけり	消え失せた。	

① 【春日龍神の物語】

鎌倉時代の華嚴宗の僧、明恵上人（ワキ）は
 入唐渡天（唐に入り、天竺へ渡る事）し
 仏跡訪問を思い立ちます。その暇乞い（別れを
 告げる事）の為に春日明神へ参詣すると
 春日宮守の翁（前シテ）が現れます。
 そして春日明神がいかに明恵上人を
 特別に大切に思っているかを告げ、
 春日山は釈迦が説法したという靈鷲山と
 同じ位徳の高い場所だと言って
 渡航を制止します。春日宮守の翁は
 思い留まるなら釈迦の一代記を見せると言い
 実は自分は時風秀行だと言って姿を消します。

明恵上人が神託を喜んでいと
八大龍王を始めとして
百千眷属を引き連れた諸仏が現れ、
釈迦が靈鷲山で説法した有様を見せます。
明恵上人は入唐渡天を思い留まり、
龍神諸仏はそれぞれ帰り去ったのでした。
春日大社は平城京遷都にあたり、
都の守護の為、鹿島神宮（茨城県）から
タケミカズチノミコトを三笠山に勧請したのが
始まりとされます。
その時に供奉したのが時風と秀行。
能『春日龍神』の前シテはこの二人を一人として
取り扱っています。

② 【八大龍王】

八大龍王とは仏法を守護する龍族の八王。
難陀龍王（なんだりゅうおう）
跋難陀龍王（ばつなんだりゅうおう）
娑伽羅龍王（しゃからりゅうおう）
和修吉龍王（わしゆきりゅうおう）
徳叉迦龍王（とくしゃかりゅうおう）
阿那婆達多龍王（あなばだつたりゅうおう）
摩那斯龍王（まなしりゅうおう）
優鉢羅龍王（うはつらりゅうおう）
釈迦が靈鷲山で説法した時
その会座に八大龍王が列座したという。

③ 【和歌の引用】

「春日野の 飛ぶ火の野守 出でて見よ
今いくかありて 若菜摘みてん」
（春日にある飛火野の番人よ、
外に出て春の様子を見てみなさい。
いったいあと何日すれば
若菜を摘めるようになるのかと。）
春日野には軍事的な合図の狼煙を
あげるための施設、烽（とぶひ）が置かれており

そのあたりを飛火野といました。

④ 【南方無垢世界】

法華經によると龍女が宝珠を佛に奉って

南方無垢世界に生れたとされています。

なので龍女は南方に帰ります。

⑤ 【冬の能】

能『春日龍神』は春の季節に分類されます。

さて、引用された和歌「春日野の」

この下の句の「若菜摘みてん」、若菜とは

春の七草のこと。1月7日に七草粥を食べる

習慣は現代も残っています。年初めに

「若菜摘み」という風習がありましたので、

この和歌は正月を心待ちにしている様子です。

現代の感覚だと正月は「冬」になると思います。

引用された和歌から関連させて

「冬の能」として選曲しました。

明恵上人を引き留めるべく

神々が一同に会して本国のあらたかさを説く。

能『春日龍神』はたいへんおめでたい曲です。